**様式 C-19**

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１３日現在

**機関番号：１４４０１**
**研究種目：基盤研究（B）**
**研究期間：2008～2010**
**課題番号：２０３２００８１**
**研究課題名（和文）学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究**
**研究課題名（英文）A Multipronged and Positive Study on the History of Korean Language Education in Modern Japan through Textbook Analyses**

**研究代表者**
**植田　晃次（UEDA　KOZI）**
**大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授**
**研究者番号：９０２９１４５０**

研究成果の概要（和文）：
（１）資料の原物を実見する「原物主義」、人物の全生涯を連続的に捉える「人物史主義」という方法論を確立した。これに基づき、（２）「旧朝鮮語学」と呼びうるものの存在とその内容を明らかにした。（３）「旧朝鮮語学」に基づく学習書の書誌調査・収集・分析を行った。（４）「旧朝鮮語学」を代表する学習書の解題を行い、その著者の経歴・活動についての研究を行った。（５）朝鮮語研究会の活動・性格と出版物について解明した。

研究成果の概要（英文）：
There are two methodologies for conducting literature reviews: one in which actual materials are used, and the other in which one tries to understand an author by analyzing his/her personal history.
With this in mind, we threw light on old Korean linguistics (OKL). We carried out a literature review of Korean textbooks that deal with OKL. We analyzed the content of the representative textbooks written within the framework of OKL and explored the authors' career and activities. And we found the activities, the characteristics, and publications of *Chosengo Kenkyuka*i (The Society for Study of the Korean Language).

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００８年度 | 4,300,000 | 1,290,000 | 5,590,000 |
| ２００９年度 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |
| ２０１０年度 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 10,500,000 | 3,150,000 | 13,650,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：朝鮮語教育史、朝鮮語学習書、旧朝鮮語学、朝鮮語研究会、朝鮮語奨励試験、原物主義、人物史主義、朝鮮語教育

## １．研究開始当初の背景

（１）国内の研究：櫻井義之が書誌学の観点から近代日本における朝鮮語学習書の研究を行い、梶井陟・山田寛人らがそれを手がかりとして研究を行い、朝鮮語教育史という観点の提示が行われてきた。同時に漢語（中国語）・ロシア語･日本語についても教育史研究や資料の復刻が行われてきた。また、松原孝俊らにより江戸末～明治初期の朝鮮語教育を対象とする研究も進められてきた。さらに、植田晃次は３名の研究協力者と共に、先行研究を承けつつ、2005～2006 年度科学研究費

基盤研究（B)「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」(課題番号：17320085）を遂行し、２冊の報告書『朝鮮語教育史人物情報資料集』・『日本近現代朝鮮語教育史』、およびその他個別論文を公表した。

（２）国外の研究：大韓民国では、2004 年に『朝鮮文朝鮮語講義録合本』・『月刊雑誌朝鮮語』（亦楽）他の資料が影印・刊行された他、片茂鎮・李康民などによって、主に日本語からの視点に基づいて関連する研究が行われてきた。

前述の科学研究費による研究では、日本近現代朝鮮語教育史の全体像を描くことを試み、総論にあたるものとして一定の成果を挙げた。これに続く各論のひとつとして、近代日本における日本人に対する朝鮮語教育史を学習書という媒体に着目して多元的・実証的に研究することが次の課題となった。外国語教育において、制度とともに三位一体を成す要素である教育者と学習者を媒介するものとして学習書を位置づけたためである。

２．研究の目的

近年、日本社会では朝鮮語学や朝鮮語教育への関心の高まりとも相俟って、近現代日本における朝鮮語教育史への関心が高まりつつある。このような社会的･学術的状況を念頭に置き、学習書の分析という共通の基盤の上で、言語学・朝鮮語学・朝鮮語教授法等のより言語そのものに即した分野と、社会言語学・言語政策論・朝鮮語教育史等といったより言語の社会性に着目した分野からの考察とを相互に関連させて分析することによって、近代日本における朝鮮語教育の実態を、多元的かつ実証的に提示・再検討することを目的とした。

本研究の概念を下図に示す。

<table>
<tr><td>方法⇒結果・貢献</td><td colspan="5">ミクロな視点からの朝鮮語教育史研究　⇒　朝鮮語教育の連続性と断絶性の解明、日本人の朝鮮語観の解明、現代の朝鮮語教授法への提言等</td></tr>
<tr><td>分析の対象</td><td colspan="5">学　　習　　書</td></tr>
<tr><td rowspan="2">依拠する学問領域</td><td>朝鮮語教授法</td><td>言語学・朝鮮語学</td><td>言語政策論</td><td>社会言語学</td><td>朝鮮語教育史</td></tr>
<tr><td colspan="5">書誌学的基礎</td></tr>
</table>

図　本研究の概念図

学習書という共通の分析対象を設定し、（１）書誌学的基礎を共通する基盤として構築した上で、（２）朝鮮語教授法、（３）言語学・朝鮮語学、（４）言語政策論、（５）社会言語学、（６）朝鮮語教育史から多元的にアプローチして分析を行う。（２）～（６）は概念図の縦方向に各々独立したものではなく、破線で示した部分で横方向にも互いに影響を持つ。

３．研究の方法

（１）書誌学的基礎の構築

先行研究を参照し、すでに所在が確認されている学習書の書誌学的調査、および資料収集を行う。また、未確認資料の発掘を行う。

まず、当該時期の朝鮮語教育史上でひとつの時代を画すと目される朝鮮語研究会（李完応会長・伊藤韓堂主幹）発行の学習書の書誌学的調査、および資料収集を行う。

さらにその他の学習書についても同様の調査、および資料収集を行う。

（２）朝鮮語研究会とその出版物の研究

まず、従来朝鮮語奨励のための（半）官製団体であるとされていた朝鮮語研究会の性格の再検討を行う。

次に、『朝鮮文朝鮮語講義録』（以下、『講義録』）に代表される朝鮮語研究会の出版物について分析を行う。『講義録』については、異本の総合的分析、掲載記事の分析、教育カリキュラムと教育法の分析を行う。また、『講義録』と同会発行のその他の出版物との関係を解明する。

（３）「旧朝鮮語学」の学習書と著者の研究

朝鮮語研究会発行以外の「旧朝鮮語学」に基づく学習書の書誌学的調査、および資料収集を行い、主要な学習書とその著者に対する分析を行う。

４．研究成果

（１）方法論の確立

研究の過程で、先行研究に示された書誌の不正確さや曖昧さが明らかになった。さらに、影印本資料に関して、その出典が明らかにされていないこと、蔵書印の一部を消すなど改竄して影印に付したケースがあることが原資料を判明した。また、デジタル化された資料についても、実際の形態･様態、表紙の色調などが確認できない場合があることが明らかになった。これらにより、影印本を資料とする研究の危険性が明らかになった。加えて、主として日本語非母語話者が、明治期から第２次世界大戦終結までの時期（以下、便宜上「戦前」、それ以降を「戦後」）のやや古めかしい日本語について、「扶桑人」を「扶安人」、「槿土民」を「勤土民」と読んでしまう類の誤りを犯し、それに基づいて荒唐無稽の立論をしている場合が存在することがわかった。

そのため、資料に関して、影印本やデジタル化されたものを最終的な判断に用いるこ

とは極力避け、可能な限り原物を実見した資料に基づいて研究を行う、徹底的な「原物主義」という方法論を確立した。

次に、「人物史主義」という方法論を確立した。これは、朝鮮・朝鮮語と関わらない時期を含めたその人物の生涯を通して、時代の中にその人物や著作を位置づけて考察する方法であり、予め想定された結論に向かって、あるいは、ある人物の経歴の一部やその時期の言説を取り上げて分析が行われがちであった従来の研究とは異なる。

（２）「旧朝鮮語学」の存在の発見とその内容の解明

学習書の分析によって、「旧朝鮮語学」というべきものが存在することを見出し、その内容を明らかにした。

「旧朝鮮語学」とは、「戦前」の日本人対象の朝鮮語教育での文法や教育法である。

その一例として、「朝鮮語」と呼ばれるものが「純諺文口語体（口語を基礎にした朝鮮語）」を指すのに対し、「朝鮮文」と呼ばれるものが「漢字まじりの文語文（漢字語を漢字で表記したものの中に助詞や語尾を諺文で表記し文法関係を示した独特の文体）」を示す概念であることを突き止めた。

また、学習書の著者たちが朝鮮語という言語を如何に捉えて分析したのかという朝鮮語認識が、ある意味で「戦後」のものより深いことが明らかになった。但し、それによる朝鮮語教育の成果については不明である。

さらに、「旧朝鮮語学」は、「新朝鮮語学」と呼びうる現代の朝鮮語学とは、「戦前」・「戦後」を通して外務・警察畑で活動した相場清を例とするような官の組織の一部を除いて、基本的には断絶していることも明らかになった。

（３）「旧朝鮮語学」に基づく学習書の調査・収集・分析

国内の地方図書館や私立図書館に「旧朝鮮語学」の学習書・辞書類多数が所蔵されていることが判明した。都道府県立図書館所蔵資料について、「原物主義」による調査をほぼ終えた。

また、大韓民国国内にも、「旧日書」として、大量の当該資料が存在していることが判明し、その利用法を開拓した。

（４）「旧朝鮮語学」の代表的学習書についての研究

宝迫繁勝『韓語入門』・『日韓善隣通語』に代表される明治期前半に活動した人物らとその著作について、薬師寺知曨『文法註釈韓語研究法』を始めとするその後の時期に活動した人物らとその著作について調査・分析を行い、経歴と著作、社会的・歴史的背景との関連を明らかにし、著作の解題を行った。

宝迫について、従来は『交隣須知』との関わりを中心に知られていた。本研究では、まず姓の読みが「ほうせこ」ではなく、「ほうさこ」と思われることを、文献調査に加えて現地調査を行い明らかにした。また、『交隣須知』刪正以降の政治活動について、新たに発見した資料を手掛りに解明した。また、明治維新をキーワードとして、宝迫を彼が生きた時代の中に位置づけて考察した。

薬師寺について、従来は活動した時期に従い、メディア論・朝鮮語学・朝鮮教育史・郷土史等それぞれの分野でその生涯が切り取られて取上げられてきた点を総合し、別府地獄めぐりと朝鮮語をつなぐ人物として「人物史主義」によりその生涯を再考した。

（５）朝鮮語研究会についての研究

①朝鮮語研究会の活動・関わった人物・出版物などについて分析を行い、同研究会の活動とその性格の再検討を行った。その結果、現存する資料に基づき、これまで不明であった時期を含めてその活動の一端を明らかにした。さらに、総督府の深い関与の下で、朝鮮語学習の奨励・朝鮮語教育の推進を行った（半）官製団体であるという従来の評価とは異なり、朝鮮語奨励試験を利用して出版物の販売促進・出版物の販路拡大を試みた民間団体であるという評価を提起した。

併せて同会と関連の深い『朝鮮思想通信』の分析を行い、著者等の経歴・人脈・人間関係等について調査した。

②代表的な出版物のひとつである『朝鮮文朝鮮語講義録』の形態・内容についての研究を行った。その結果、『講義録』は以下の 6 点のようにその形態・内容が予想以上に複雑であることが判明した。

第 1 に、元来通信教育教材である『講義録』は記事別に綴じ直して利用することを前提とし、「(雑誌の)バラ」・「綴り」・「合本」・「製本」と呼ぶべき諸形態が存在することが明らかになった。

第 2 に、とりわけ現存が確認できた「合本」については、ひとつとして同一のものがないことが判明した。またこれらの「合本」の分析に基づき、現存する異本の書誌的事項とその生成過程が明らかになった。

第 3 に、第 1 回・第 2 回『講義録』は「（雑誌の）バラ」の原形が保たれたものが管見の限りでは現存しておらず、第 3 回『講義録』の「（雑誌の）バラ」や「合本」等を参照しつつ、復元を試みた。

第 4 に、『講義録』の掲載記事の整理・分析を行った。

第 5 に、『講義録』の掲載記事を分析し、“ 本科目 ” にあたるものを「朝鮮語会話」・「朝鮮語発音及文法」・「普通学校朝鮮語読本訳

解」・「朝鮮式漢熟語の解説と其の用例」、「朝鮮書翰文例」、「朝鮮文章講話」、「動詞の用例」、「日用朝鮮語六千語集」、その他を“雑纂”と定義した。さらに“本科目”と“雑纂”の一部（「語の活用に就て」・「感動詞の対照」）の内容の分析を行った。

第 6 に、『講義録』の教育内容の構成・教育法・カリキュラムの特徴についての分析を行った。

③現地調査により、影印本の『講義録』（亦楽）は大韓民国・建国大学尚虚記念図書館蔵書に手を加えたものが不完全に影印されたものであることを突き止めた。

（６）その他

日本人に朝鮮語を教えた朝鮮人教師についてのデータを整理した。

以上によって、学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の実像の一端が多元的･実証的に明らかになった。加えて、朝鮮語教育史研究の新たな方法論が確立された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①植田晃次、薬師寺知曨－別府地獄めぐりと朝鮮語をつなぐ人、言語文化研究、査読有、37 号、(2011)、1-19

②呉大煥、朝鮮語研究会の教育活動と教育内容及び隠れた教育目標、北東アジア研究、査読有、20 号、(2011)、67-79
http://www.u-shimane.ac.jp/36near/41kenkyu/file/20-06_oh.pdf

③植田晃次、朝鮮語研究会(李完応会長・伊藤韓堂主幹)の活動と民間団体としての性格、言語文化研究、査読有、36 号、(2010)、25-44
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBSLCK001/slc_36_025.pdf

④植田晃次、「講義録」という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程、延辺大学学報(社会科学版)、査読無、42 巻増刊、(2009)、157-162

⑤植田晃次、日本近現代朝鮮語教育史と相場清、言語文化研究、査読有、35 号、(2009)、1-20
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBSLCK001/slc_35_001.pdf

⑥矢野謙一、宝迫繁勝の朝鮮語と明治維新、延辺大学学報(社会科学版)、査読無、42 巻増刊、(2009)、153-156,167

⑦呉大煥、『朝鮮文朝鮮語講義録』の発音法に関する二つの記事の内容分析、総合政策論叢、査読有、17、(2009)、11-32
http://www.u-shimane.ac.jp/02university/32kiyou/01hamada/10sogo/file/seisaku1701.pdf

⑧山田寛人(研究協力者)、『朝鮮文朝鮮語講義録』発行の背景、北東アジア研究、査読有、17 号、(2009)、135-155
http://www.u-shimane.ac.jp/36near/41kenkyu/file/17-11_yamada.pdf

〔学会発表〕（計１２件）

①植田晃次、宝迫繁勝の経歴と活動－日本近現代朝鮮語教育史の視点から、朝鮮学会（第 61 回大会)、2010.10.3、天理大学

②矢野謙一、朝鮮文の特徴と役割、朝鮮学会（第 61 回大会)、2010.10.3、天理大学

③植田晃次、宝迫繁勝の経歴とその著作、日韓･日朝交流史研究会(第 20 回)、2009.11.27、島根県立大学

④呉大煥、朝鮮語研究会の教育活動と教育内容、日韓・日朝交流史研究会(第 20 回)、2009.11.27、島根県立大学

⑤植田晃次、『朝鮮文朝鮮語講義録』異本研究、朝鮮学会（第 60 回大会)、2009.10.4、天理大学

⑥植田晃次、「講義録」という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程、中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム(第１回)、2009.8.22、延辺大学(中国)

⑦矢野謙一、宝迫繁勝の朝鮮語と明治維新、中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム(第１回)、2009.8.22、延辺大学(中国)

⑧植田晃次、朝鮮語研究会とその活動、朝鮮語研究会、2009.1.10、大阪大学

⑨植田晃次、日本近現代朝鮮語教育史と奥山仙三『語法会話朝鮮語大成』、日韓・日朝交流史研究会(第 16 回)、2008.10.24、島根県立大学

⑩矢野謙一、『朝鮮語第三種受験者必携』の朝鮮語、日韓・日朝交流史研究会(第 16 回)、2008.10.24、島根県立大学

⑪呉大煥、「朝鮮文朝鮮語講義録」にある発音教育に関する記事、日韓・日朝交流史研究会(第 16 回)、2008.10.24、島根県立大学

⑫山田寛人、朝鮮語学習書出版の背景、日韓・日朝交流史研究会(第 16 回)、2008.10.24、島根県立大学

〔図書〕（計１件）
①植田晃次 編、植田晃次 発行、学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史(研究成果報告書(1))、(2011)、総頁数 117

６．研究組織
(1)研究代表者
植田　晃次（UEDA　KOZI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：90291450

(2)研究分担者
矢野　謙一（YANO　KEN’ICHI）
熊本学園大学・外国語学部・教授
研究者番号：00271453

呉　大煥（OH　DAEWHAN）
島根県立大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：20340218

(3)研究協力者
山田　寛人（YAMADA　KANTO）
広島大学・非常勤講師